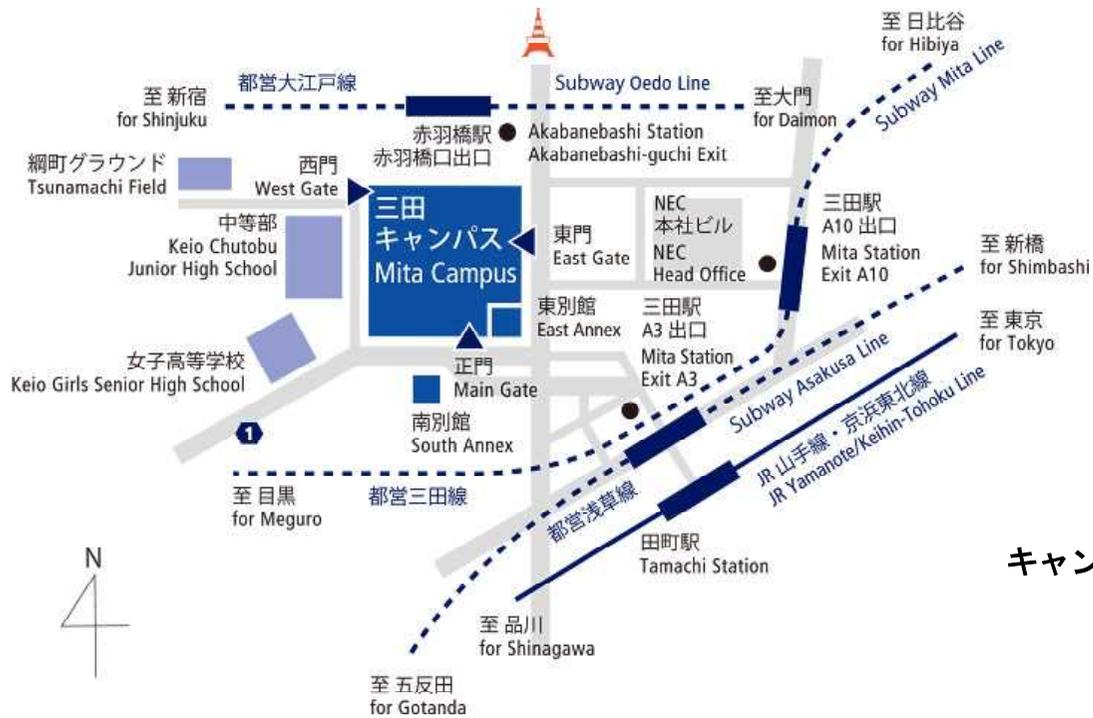
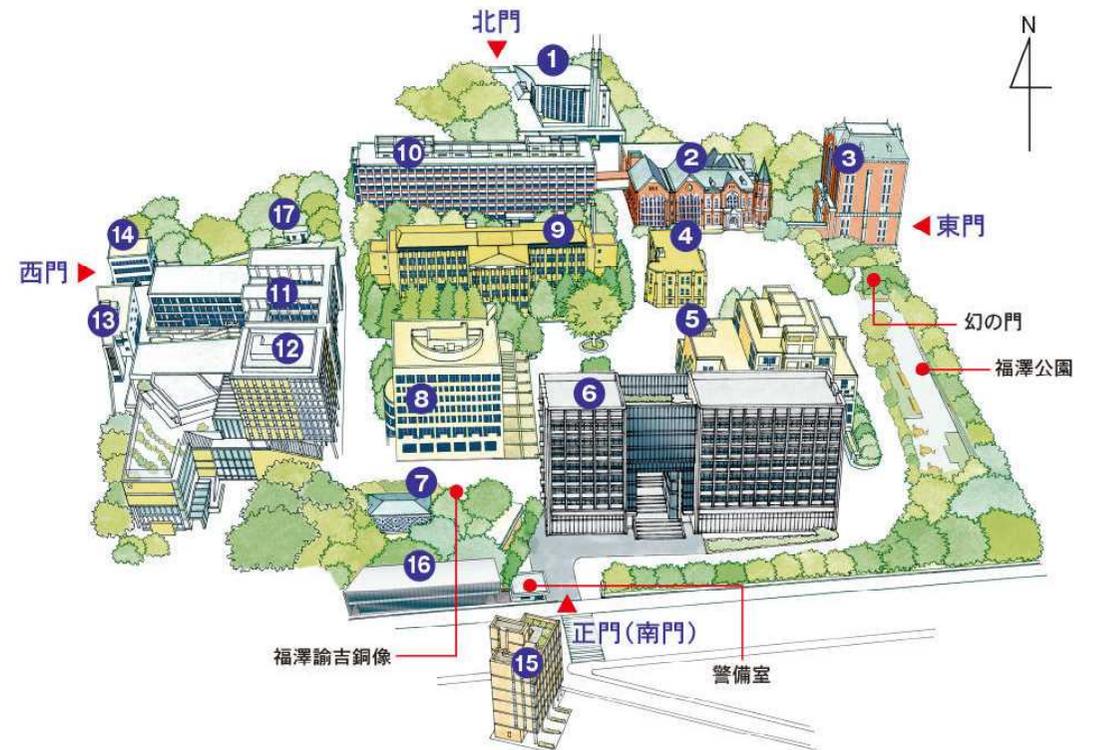


交通アクセス



※仏教文学会ホームページ (<http://bukkyoubun.jp/>) にも掲載しております。

キャンパスマップ (⑥が南校舎)



田町駅 (JR 山手線 / JR 京浜東北線) 徒歩 8 分
 三田駅 (都営地下鉄浅草線 / 都営地下鉄三田線) 徒歩 7 分
 赤羽橋駅 (都営地下鉄大江戸線) 徒歩 8 分

※より詳しい経路は以下のホームページをご参照下さい。
 「慶應義塾大学 三田キャンパス アクセス」
 (<https://www.keio.ac.jp/ja/maps/mita.html>)

《シンポジウム》 寺社縁起に近代はあったのか？

近年、諸地域の寺社に古くから伝わる開基伝承・高僧伝説などを考察する「縁起学」の研究が、盛んにおこなわれています。それらの研究では、学術領域を横断しつつ、おもに中世・近世を対象に、「寺院施設・仏像・宝物・絵伝・縁起書など」の宗教的な「モノ」（物質）と、「寺社伝承・仏教説話・高僧伝記など」の宗教的な「コト」（言説）とが結ばれる観点からの考察がなされてきました。

ところが、その視座を明治以降の「近代」に向けるならば、生活文化の変化や、産業社会への移行により、諸寺が有する宗教空間は、従来の「モノ」と「コト」の関係性をしだいに変えていきます。

そこで本シンポジウムでは、諸地域の宗教空間において「コト」と「モノ」の関係が揺らぎつつある時代に、その「縁起性」はなおも変わらず、いかなる本質を有してきたのかを議論することをめざします。また、明治以降の〈寺社縁起なるもの〉が「近代」のコンテクストを有するのか否かを問うのではなく、旧来の宗教空間が、近代の場においてどのように受け継がれてきたのかを考察していきます。
(鈴木 堅弘)

*

*

*

明治画家・喜田華堂による「妙應寺縁起」とその後の展開

— 絵伝・宿場・稻荷講 —

鈴木 堅弘

本報告では、岐阜県関ヶ原町妙應寺（曹洞宗）が所蔵する「妙應大姉縁起図絵」を取り上げる。同寺には、同題の縁起絵が二種類遺されており、そのうちの一つは、明治画家・喜田華堂によつて描かれたものである。華堂は、尾張藩御用絵師を勤め、尾張岸派の祖として、明治期初頭に活躍した日本画家である。同画家は、妙應寺の門前宿である今須宿の出身から、幕末期（文久年間）に自らが施主として『青坂山妙應寺縁起誌』（旧来縁起の板本化）を作成し、自身の手で旧来の縁起絵をそのまま模倣した絵伝を新たに描いた。本発表では、明治画家がつくった縁起本を紹介すると共に、華堂が新時代にむけて旧来の寺社縁起絵を模倣した意図を探り、自らの生誕地である寺院伝承に何を求めようとしたのかを考えてみたい。

また妙應寺は、江戸期には今須宿場（中山道）の賑わいと共に栄えたが、明治期に入り、東海道線の鉄道敷設によつて宿場が衰退すると、しだいに寺勢を衰えさせていった。そこで同寺は、旧来の寺院縁起に、今須稲荷なる「いなり伝承」を新たに加味することで、稲荷講の巡回拠点とし、新しい信仰形態を生み出していく。本報告では、寺院縁起が近代化のなかで衰退的に扱われていく通例ではなく、むしろ逆に、その伝承性・信仰性を積極的に拡張させていった事例を取り上げてみたい。

法然伝の近代

佐谷 眞木人

法然の伝記は、近代になってもしばらくは旧来のものが版行され続けるが、明治時代末頃になると新しい伝記が現れてくる。その契機となったのは、明治44年(1911)の法然700年大遠忌であった。この年に前後して出版された法然伝の中には特色のあるものが見られる。たとえば、川合卍翁(梁定、木葉散人とも)著の『脚本法然上人』(明治43年10月、京都宗粋社発行)は、芝居仕立ての法然伝である。また、堀尾昌晃著の『法然上人御一代記法話』(明治44年3月、法蔵館)は全十五席の法話の体裁をとる。さらに、これらに先立つ明治35年4月には、全二十二番の唱歌仕立ての法然伝『月影』(井上徳定作歌、小出雷吉作曲)が発行されている(東光社)。如上の近代法然伝に共通するのは、強い啓蒙の意図であり、その背後には従来法然伝が一般に受け入れられ難くなってきた、という強い危機感があるものと思われる。それらの内容について検討したい。

明治期の親鸞絵伝―『見真大師御旧跡要図』を中心に―

堤 邦彦

近世後期から明治初年の地方門徒圏においては、二十四輩巡拝の盛行と連動するかたちで肉筆掛幅形式の絵伝が陸続と制作され、寺坊の縁起や在地伝承にからめた絵解きが行われていた。

そのような動向の延長として明治前期には、「見真大師」号を書名に冠した旧跡案内や掛幅絵伝が京都の書肆および各地の版元から刊行されていた。木版一枚刷り、銅活字本、写真集形式など、さまざまな形態の明治版宗祖伝が編まれたなかにあつて、最も親鸞絵伝のながれを継承したのは、小野周文画、鷹津冬輝編の『見真大師御旧跡要図』(明治一五年)であろう。一幅形式の本図は全四五景の旧跡を近世版『二十四輩順拝図会』をもとに抄出した内容であり、明治初年の播州門徒により編集された京、北陸、信州、関東の宗祖旧路案内図であった。

もともと本図の特色として、一部に原拠の『順拝図会』に不載の説話画を挿入したり、原拠があえて描かなかつた宗祖その人の姿を図中に登場させて縁起由来のクライマックスを感動的に表現しようとする創作志向と物語性重視の編述方針を見出すことができる。